

国立大学の入学者選抜における英語外部検定試験 の活用について

——広島大学を事例に——

杉原 敏彦, 永田 純一, 高地 秀明 (広島大学)

広島大学では3年前に英語外部検定試験を AO 入試に導入した後、その成果を踏まえて来年度から一般入試においても活用しようとしている。優れた能力・意欲を持つ多様な人材を多面的・総合的な選抜によって判定するという国立大学の入学者選抜のミッションにとって、英語外部検定試験を活用することはどのような意味があるのか、広島大学の入学者選抜を事例としてねらい・成果・課題を探る。

1 はじめに

この度の高大接続改革の眼目の一つは、大学入試センター試験に代わる大学入学共通テストにおいて、記述式問題を出題することと英語の4技能を適切に評価するために英語外部検定試験（以下、「外部試験」）を活用することにある。このうち、大学入試における外部試験の活用については、広島大学では他の国立大学に先駆けて実施に取り組んだところである。広島大学ではどのような考え方で導入を図り、今後実施しようとしているかをまとめておきたい。

2 国立大学のミッションと入学者選抜における外部試験の活用

広島大学は、そのミッションとして「平和を希求し、チャレンジする精神を有する人材を各界、そして国際社会に輩出し、多様性を育む自由で平和な国際社会を築く役割を果たす」と規定している(広島大学(2017))。指定を受けた研究大学強化促進事業 RU やスーパーグローバル大学創成支援事業 SGU (トップ型) は、本学がそのような人材育成の取組を進める上でエンジンの役割を果たしている。この SGU 構想調書の中で明示しているが、学部入試における外部試験の導入割合を 2019 年度には 100% にしている。すなわち、すべての入試方式で志願者が外部試験を活用できるようにすることを目指すものである。

そもそも広島大学、というよりも国立大学はどのような考え方に立って大学入学者選抜を実施しているだろうか。それは、高校生が基本的な教科・科目を広く履修し、幅広い基礎的・基本的な学力・教養を身につけた上で先端的学術分野の成果を修得しうる学力を求めるとともに、多様な人材を受け入れるため選抜方式

の多様化と評価尺度の多元化に取り組むことを基本的な考え方としてきた国立大学協会((2007))。詰まるところ、意欲と学力のある多様な人材を、多面的、総合的な評価により選抜しようとするものである。外部試験を大学入試で活用しようとする精神もここにある。

広島大学での外部試験の大学入試での活用は、次の3段階に分けられる。

- ① 2016 年度入試～：AO 入試での活用
- ② 2019 年度入試～：一般入試での活用
- ③ 2021 年度入試～：大学入学共通テスト（以下、「新テスト」）での活用

3 入学者選抜における外部試験の活用

3.1 AO 入試での活用

まず、外部試験導入に当たっての本学の基本的なねらいは、外部試験を主体的に受験する人たちの英語コミュニケーション能力を高めようとする意欲や世界の様々な人たちとコミュニケーションを図りたいと願うグローバル志向に期待し、こういう人たちの本学への入学を歓迎するところにある。

入試制度の設計に当たっては考え方の整理が必要である。すなわち、この場合、導入の目的は、グローバル人材の発掘・育成にあるのか、それとも特色ある入試制度の設計にあるのか。それによって、外部試験対象者の範囲も、すべての志願者に外部試験を課すのか、それとも志願者の一部が対象であってよいのかということにつながる。それは同時に、どの入試方式で利用するかという選択とも関係してくる。広島大学では、まず AO 入試で導入し、次に一般入試に広げること考えた。

表1 広島大学 AO 入試における外部試験の利用方法
(2018 年度入試)

利用方法	学部・学科
A 出願資格を与える方法	医学部保健学科
B 加点する方法	教育学部
	経済学部
	歯学部
	薬学部
	工学部
	生物生産学部
	情報科学部
C 合否判定の際に評価する方法	総合科学部
	文学部
	法学部
	理学部

AO 入試で利用する段階であれば、特色ある入試の一つとして、たとえば科学オリンピックを利用する入試のように、志願者の一部が外部試験を利用するという入試活用もありうる。

本学では、続いて、利用の仕方、制度の運用方法について検討した。外部試験の大学入試での利用の在り方としては、三つのカテゴリー（活用方法）が考えられた。

- A 外部試験を受験し、一定の等級又はスコアを取得している者に対して出願資格を与える。
- B 外部試験を受験し、一定の等級又はスコアを取得している場合、その等級又はスコアを従来の「英語」試験に置き換える、又は加点する。
- C 外部試験を受験し、一定の等級又はスコアを取得している場合、合否判定の際に評価する。

広島大学では、AO 入試での導入を検討する部局（募集単位）に上記のA、B、Cのうちどの区分で利用するか、各アドミッション・ポリシーに照らして選択してもらうことにした。その結果をまとめたものが、表1である（2018 年度入試について）。

各部局（募集単位）の反応には、予想したとおり温度差があり、この新政策に対して積極的若しくは受容的な部局ばかりではなかった。外部試験の導入に消極的な理由は様々であるが、主に主張されたのは、従来のアドミッション・ポリシーとの不整合や英語能力は他の試験方法（大学入試センター試験や個別選抜）ですでに判定しているとの意見であった。こうした意見の底流には新たな負荷を設定することによる志願者数

表2 広島大学 AO 入試における外部試験の加点方法
(2016 年度入試)

学部	学科等	利用方法
教育学部	第三類	C2: 60 点
経済学部	経済学科	C2: 15 点
歯学部	歯学科	C2: 50 点
薬学部	薬学科	C2: 20 点
工学部	第一類	C2: 20 点
	第二類	C2: 10 点
	第三類	C2: 10 点
生物生産学部	第四類	C2: 20 点
	生物生産学科	C2: 10 点
情報科学部	情報科学科	C2: 10 点

の減少を懸念していることが読み取れた。これらの意見に対しては、この入試導入の趣旨を繰り返し説明するとともに、当該学部（募集単位）の必要とする学力（たとえば数学の学力）を英語コミュニケーション能力に置き換えるわけではなく、たとえば数学について高い学力と意欲を持っている志願者で、主体的に英語コミュニケーション能力を身につけようと努めている者がいる時、その当該主体性の部分についても評価するという考え方に立つことについて、説明を重ねて行った。

こうして 2016 年度 AO 入試で、11 学部中 10 学部での利用が始まり、その後 2017 年度入試で 11 学部、2018 年度入試で新設学部を含む全 12 学部となった。

実際に外部試験の活用を始めるに当たっては、どの外部試験を活用するか、また活用する外部試験相互の対比をどうするかという問題があった。当時は、今のような文部科学省ホームページで閲覧できる各試験団体の試験について CEFR との対比表がなかった時である。そこで、学内の専門家等の意見を踏まえて、活用する外部試験は、英検、TOEIC 公開テスト、TOEFL(iBT)及び IELTS(Academic Module)とし、「多くの外部試験が実施されているが、それぞれの試験には異なる開発・提供目的があり、それらの数値を対応させる換算表を作成することは問題を含んでいるので、本学の AO 入試に適した目安を作成した」と断って表3のような比較表を作成、適用した。

その後、AO 入試での活用2年目に当たる 2017 年度入試では、文部科学省ホームページに「各種試験団体のデータによる CEFR との対照表」がまとめられ公表された。本学独自のものと比べると対応する数値

表 3 広島大学 AO 入試に用いた外部試験等級又はスコア等比較表 (2016 年度入試)

適用区分	英検	TOEIC	TOEFL (iBT)	IELTS
SS	1 級	860 以上	92 以上	6.5 以上
S	準1 級	730 以上	80 以上	5.5 以上
A-1	—	680 以上	73 以上	5.0 以上
A-2	—	640 以上	66 以上	
A-3	—	590 以上	61 以上	4.5 以上
A-4	—	550 以上	56 以上	
A-5	2 級	510 以上	52 以上	4.0 以上

が微妙に異なるし、まず対象となる外部試験の種類自体が増加している。検討の結果、本学としては、2 年目以降、本学独自の基準から全国バージョンのものに変更することにした。全国的な活用が予想される文部科学省ホームページに掲載されている対比表 (図 1) と本学独自の対比表が並存する状態では、志願者を混乱させると判断したからである。

3.2 一般入試での活用

大学入試での活用の第 2 段階は、一般入試での活用である。一般入試での活用となれば、望ましい状態はすべての志願者について 4 技能にわたる英語コミュニケーション能力を測定することである。ところが、現実には大学の個別選抜 (個別学力検査) で、4 技能 (特に Speaking) を測定することは容易ではない。外部試験を活用する理由はここにある。本学を例にと

れば、7,000 人程度の受験生に speaking 技能試験を課すことは、時間的、物理的に困難である。また、一般入試ですべての受験者に英語 4 技能試験を課すことは、すべての受験者にそれだけの負荷をかけるわけであり、志願者が減少する恐れも考えなければならない。

広島大学では、外部試験を受験し、主体的に英語コミュニケーション能力の修得に努めようとする者を本学に受け入れることは意義のあることであると考え、2019 年度入試から英語 4 技能 (Listening / Reading / Speaking / Writing) の能力を判定する外部試験の結果を利用し、本学が定める基準 (CEFR の B2 以上) を満たしている場合には大学入試センター試験の外国語 (英語) (以下、センター試験の英語) を満点とみなす制度を始めることにした。

このような制度設計を学内で議論する際、慎重論、消極論も少なくなかった。慎重な意見の例を挙げると、たとえば、満点とみなすという一律の対応ではなく、外部検定のランクに応じて加点する方が妥当ではないか、外部検定試験では志願者の経済状況や居住地によって受験の不公平が存在するのではないかと、また「替え玉受験」等不正受験の恐れが払拭できない、2021 年度入試から新テスト導入が計画されているが、本学の導入をその時期又はそれ以降にするのが妥当ではないか、グローバル人材の育成を目指すとき英語だけのこのような対応では不十分で、他の言語にも適用すべきではないか、などの意見である。

各試験団体のデータによる CEFR との対照表

CEFR	Cambridge English	英検	GTEC CBT	IELTS	TEAP	TOEFL iBT	TOEFL Junior Comprehensive	TOEIC / TOEIC S&W
C2	CPE (200+)			8.5-9.0				
C1	CAE (180-199)	1 級 (2810-3400)	1400	7.0-8.0	400	95-120		1305-1390 L&R 945~ S&W 360~
B2	FCE (160-179)	準1 級 (2596-3200)	1250-1399	5.5-6.5	334-399	72-94	341-352	1095-1300 L&R 785~ S&W 310~
B1	PET (140-159)	2 級 (1780-2250)	1000-1249	4.0-5.0	226-333	42-71	322-340	790-1090 L&R 550~ S&W 240~
A2	KET (120-139)	準2 級 (1635-2100)	700-999	3.0	186-225		300-321	385-785 L&R 225~ S&W 160~
A1		3 級-5 級 (790-1875)	-699	2.0				200-380 L&R 120~ S&W 80~

図 1 各試験団体のデータによる CEFR との対照表 (文部科学省 (2016))

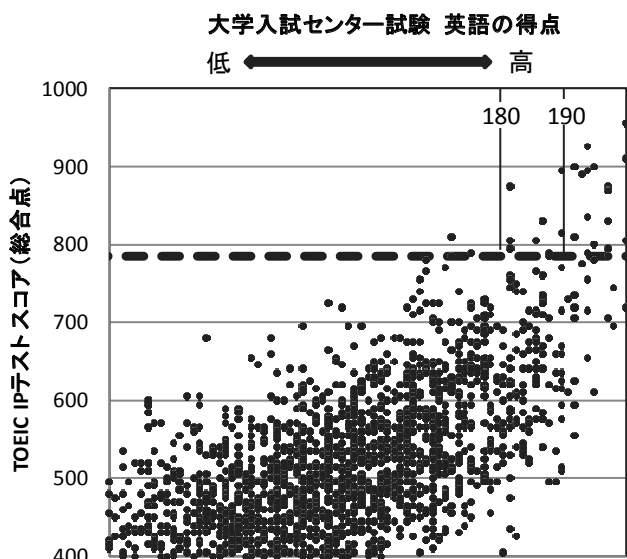


図2 センター試験の英語の得点及び本学 TOEIC IP テストスコアの相関 (20XX 年)

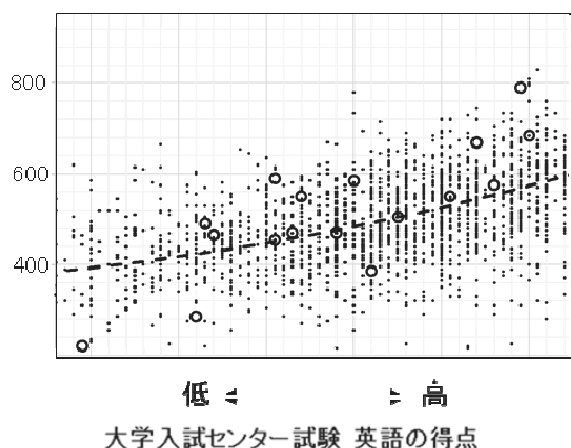


図3 センター試験の英語の得点及び本学 TOEIC IP テストスコアの相関 (20YY 年) (図中の○印は、外部試験を活用して入学した者、合計 17 人を指す)

このうち、外部試験の一定の級・スコア以上の保持者についてセンター試験の英語を満点とみなす妥当性については、図2のような学内データがあり、これを用いて説得した。

本学入学生の全員が、入学直後の初年次5月に TOEIC IP テストを受験することになっている。彼らの多くは同じ年の1月にセンター試験英語を受験している。

そこで、TOEIC IP テストスコアにおける CEFR 対照表の B2 相当値 785 点以上の得点者約 30 人がセンター試験で何点取得しているかを見ると、図2のと

おり最低値で約 180 点、多くの者が約 190 点以上取得しているのである。

本学でこのような一般入試での活用方針を決めた時には、国立大学における新テストでの外部試験の活用の中身やスケジュールは未だ確定していなかった。それでも本学での実施を決定・公表したのは、英語4技能のバランスの取れた発達を目指す英語教育を評価し、本学の大学入試もそのような考え方で実施すること、また、本学としては、英語コミュニケーション能力の発達に主体的に取り組む人たちを積極的に迎え入れようとしていることを、高校へのメッセージとして伝えたいと考えたからである。

次に、図3は横軸にセンター試験英語の得点、縦軸に TOEIC IP テストスコアを取り、20YY 年度入学者について一人ひとりをドットしたグラフである。このうち外部試験を活用する AO 入試によって入学した学生は 17 人該当する(図3中の○印)。これら 17 人を除く入学生、すなわち外部試験を活用しなかった入学生の回帰曲線に注目すると、当該 17 人のうち 14 人(82.4%)が縦軸上で当該回帰曲線より上位に位置している。これはすなわち、外部試験を活用した入試で入学した者が、全学の平均よりも英語コミュニケーション能力が高いと見込まれる。このことは、外部試験を活用した入試を実施することの意義とその方式による入学者に期待できることを示唆しているように思う。ただし、このような追跡調査は今後も積み重ねていく必要がある。

3.3 新テストでの活用

活用の第3段階は、新テストでの活用である。国立大学協会は、2017年11月「基本方針」を公表し、続いて2018年3月「ガイドライン」を公表して、英語認定試験の活用方法の基本を示した。本学としては、新テストの導入以前から「外部試験の AO 入試での活用、一般入試での活用」を図ってきたのは述べたとおりである。新テストにおいても、先んじて実施している「外部試験の結果を利用し、本学が定める基準を満たしている場合には、新テストの英語を満点とみなす」制度を継続することにした。

本学でこの「みなし満点方式」を実施するのは、せっかく始めた外部検定の一般入試での活用スキームを継続したいと考えたからである。一方、理論的に整理する必要事項も残っている。

一つには、外部試験受検の有効期間である。新入試に先んじて本学で始める一般入試での外部試験の活用に当たっては、受験する外部試験の時期は、高校生

活を通じた主体的活動を評価するという観点から入学時から入試出願時までの3年間とした。かたや新テストのスキームは高校3年次の4月から12月までの2回である。本学の一般入試について、高校3年間という有効期間をやめて、新テストのスキームに合わせるかどうか、検討を行っている。

二つ目は、国大協ガイドラインとの整合の問題である。ガイドラインでは、①出願資格、②加点、③出願資格かつ加点、の3方式としている。本学の「みなし満点」方式は、そのいずれなのか。②の加点方式の一類型として整理できるか、この点も検討中である。

こうした点について最終的な検討・決定を行い、詳細については本年度末を目途に公表することを予告している。

4 おわりに

今後、外部試験を利用したAO入試の成果・課題について継続して分析を行いたい。具体的には、外部試験を利用したAO入試により入学した学生の入学後の英語活用能力の伸長について、入学者の成績並びに初年次5月以降の成績について、追跡してみたいと考えている。

また、大学入学者選抜における外部検定の活用について、様々な懸念や疑問が指摘されている。入学者選抜制度を設計する権限と責任は行政にある。行政においては、実施までの残された時間、懸念や疑問を取り除く取組みと説明責任を果たす努力とを最大限に行ってもらいたい。一方で、新テスト受験初年度の当該高校生はすでに高校に入学し、高校の教育課程を履修しているのである。そのような時期を迎えた今自戒を込めて思うのは、大学として高校生に不安と混乱を与えるだけの言動は慎まなければならないということである。

参考文献

- 広島大学 (2017) 広島大学新長期ビジョン「SPLENDOR PLAN 2017」, 2017年4月.
- 国立大学協会 (2007) 「平成22年度以降の国立大学の入学者選抜制度—国立大学協会の基本方針—」, 一般社団法人国立大学協会, 2007年11月.
- 文部科学省 (2016) 「平成27年度英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会 (第2回) 配付資料・資料3」, 2016年3月.